



まるの福連携2023

一般社団法人福祉システム北海道

高橋 銀司代表理事

異業種との対話から福祉を探る

◆エピソード6 落語家 桂 三段さん



かつら・さんだん 1976年、帯広市生まれ。2005年に六代桂文枝に入門。大阪府と島根県で活動し、2015年に活動拠点を札幌市に移す。古典落語、桂文枝作の落語、自作の創作落語を演じるほか、2015年に洗礼を受けクリスチャンとして福音落語を創作し伝道活動もしている。道内179市町村を中心に活躍中。

●落語家のお仕事について教えてください。
落語は皆さん、ご存知ですね。現在は札幌に住んでいるので、道内179市町村を回って、落語をしています。自主興行や、町内会の敬老会などでも落語をしています。学校で職業紹介として中高生に落語をすることもあります。また、私はクリスチャンなので、「福音落語」というのを作成し、教会で落語をすることもあります。

●今まで仕事をしてきた中で面白かった仕事はありますか？
どこでも落語はライブなので面白いのですが、各地に行けるといいうのも、この仕事の面白いところではあります。修業時代に師匠が海外公演をしていたので、それに付いて海外に行ったこともあります。シンガポール、ロサンゼルス、トロント、ニューヨーク、シカゴなどに行きました。

●海外での、お客さんの反応はどうですか？
めちゃくちゃ受けます。というのは、お客さんは海外に住んでいる日本の方が多い。なので、「日本の笑い、待ってました」というような感じでめちゃくちゃ受けるんです。僕は修業時代だったので、前座の前座として出させてもらったのですが、勘違いするくらい、めちゃくちゃ受けました。

●落語をするとき、緊張されますか？
高座の時は、常にある程度緊張しています。緊張しすぎはよくないのですが、ある程度の緊張感を持つことで、良いパフォーマンスをすることができると思います。

●良いパフォーマンスをすることと、お客さんに受けるということは一貫するものですか？
これは本当に難しいです。受ける、受けないというのは、自分の出来も関係しますが、お客様によることも多いのです。例えば、お客様の人数や、男性が多いか女性が多いかにもよります。男性の場合、声に出して笑わない方が多く、女性は声に出して笑う方が比較的多いと感じます。なので、女性が多い会場であれば、盛り上がっているように感じる。しかし、落語が終わった後、男性のお客様に「とても面白かったです」と感想を述べてもらえることもある。声に出して笑っていないが、とても楽しんでもらっていることもある。なので、受ける、受けないを笑いの量で測ってはいけないというのはありますね。

●落語家になると思ったきっかけを教えてください。
当時は20代前半の頃でした。何を将来仕事にしていくのか、真剣に考え、どうせやるなら、人生をかけて極めるような仕事に就きたいと思っていました。はじめ、歯科技工士という仕事に就いたのですが、合わずに辞め、途方に暮れていました。そんな時に、東京でお笑いを始めた友人に誘われて、漫才を始めました。その3カ月後、その友人が、服飾デザ

イナーになると言っていて、コンビは解散。親にも相談して東京に出てきていたので、相方が居なくても1人でお笑いを続けていこうと思いい、寄席小屋に勉強のために見に行きました。その時に、落語の奥深さを感じ、生涯をかけて極めたいと思いい、落語家を目指そうと決めました。

2005年入門なので、18年目になりますね。
●落語家をしている中で大切にしていることはありますか？
準備、つまり稽古(けいこ)ですね。本番は短くて20分くらい、長くて90分くらいですが、準備に時間をかけています。稽古をすることによって本番のパフォーマンスが上がります。イベント等に呼ばれた時は、そのイベントの主催者がどんなことを求めているのかを考えてネタを選ぶようにしています。

あとは、会場の準備です。わかりやすく言うと、空間づくりです。お客様との一体感を出せるようにするための細かい準備を大切にしています。
●失敗談があれば教えてください。
忘れ物が多いんです。白足袋を忘れたことがあります。そんな時、私服の白い靴下を履いて、出たこともあります。帯を忘れたこともあります。そんな時は風呂敷を畳んで、帯

の代わりにして出ました。どちらもバレませんでした(笑)。
若いころは、どんな仕事でも受けるスタンスを美学だと思っていました。例えば、コンビニのオープンイベントの仕事を受けたことがあります。コンビニの会計カウンターのところを高座をつくってもらい、そこで落語をしました。その時、ほとんど誰も見ていなかったのですが、1人だけ私のことをじっと見ている女性がいたので、その人のためだけでもやろうと思いい、落語をしました。終わった時に、その女性が来て、「温かいお茶取っていただけますか」と言われました。私の横にあったので、取れなかったんですね(笑)。あの時の美学は間違えていましたね。現在は主催者側の要望も聞いて、しっかり検討した結果、このイベントに落語は向いていないなと思ったら、きちんと説明してお断りするようになっています。

●落語家をしている中で、福祉・介護を感じることはありますか？
老人ホームや高等養護学校、敬老会などでも落語をすることがあります。落語会をやることによって、例えば、1人でお住まいの方が会場に来ることは、外出するきっかけになり、落語を楽しむこと、に加えて、人と交流することにつながります。その場にいたことで、その場所にいた人と思いい出が共有でき、会話を楽しむこともできますよね。このようなことが福祉につながっているのではないかなと思いいますね。

●落語中にトラブルがあったときなどはどのように対処していますか？
そういうことは、あまりないのですが、口の中が乾いてしまうことがあります。緊張とか、室内が乾燥しているとか。今年の夏は暑かったですよね。北海道はまだエアコンがない会場があり、主催者の方が暑いだろうと気をつけて、私から少し離れたところに扇風機を置いてくださったんです。実際、本番が始まったら、扇風機の風で口の中がカラカラで乾いて乾いて仕方がない。気合いで乗り切りました。一席終わった後、扇風機を即止めました。その後すぐその話をして、一笑い取りました。(笑)



◎インタビュー◎

たかはし・ぎんじ 1987年、小清水町出身。北海道介護福祉学校や北海道医療大卒業後、障害福祉事業所に勤務の傍ら、北星学園大大学院社会福祉学専攻修士課程修了。オホーツク社会福祉専門学校専任教員を経て、現在、日本医療大総合福祉学部助教およびEzo'n music提携ジャーナリスト(NPO経営・福祉系)としても活動。社会福祉士、介護福祉士。



「〇(まる)福連携プラス」YouTube配信中

インタビューの様子などを視聴できる動画チャンネル「〇(まる)福連携プラス」がYouTubeで配信中。紙面に掲載し切れなかった内容を含め10分ほどにまとめている。

